

八 擔いだら下してはならぬ

世に八方美人と云ふがある。八方八面に色目を使つて、さんざ浮身をやつした擧句が八方塞がり。頭痛鉢巻の行止り。宗教の信仰に關して、聽聞の時は須らく板を卸して、虚心平氣に、擔板漢たらざるを要し、いざ修行實修となれば、忽ち兩擔板漢、馬車馬式でなくてはならぬ。私は隔てをするのが嫌ひゆゑ、何様でも信仰します、稻荷様でも、薬師様でも、弘法様でも、日蓮様でも、天神様でも、觀音様でも、阿彌陀様でも、何でも見當り次第信心します。信心して悪いことはありません、皆御利益が蒙られます、なんて云ふ人がある。是は一寸開けたやうであるが、實は御利益目的の八百屋信仰で、一朝事に衝突れば屹度崩れて了ふ。聽聞の仕方が既に間違つて居る。聞法の時利慾の板を擔いだ擔板漢であつて、修行の時板を下した腰抜けである。こんな人の所謂信仰を叩いて見れば、「南無妙法蓮華經。南無阿彌陀佛。アーメン。おんあばきあべーるしやのう。なむからなんのうとらやあく」何が何やら薩張解らぬ。道は一つ、どれか一つに定めなくては、向へ行けぬ。之と同時に、一旦擔いだ板は中途で下してもいかぬ。彼の蜀山人が門人に諫められて、已後は一切禁酒、酒はやめたと云ふので、

黒鐵の門より堅き此の禁酒、ならば手柄に破れ朝比奈とやつたはよかつたが、三日經たぬに禁を破つて、

我が禁酒破れ衣となりにけり、さあついでくれやれさしてくれ

狂歌を詠じたと申す事。支那には今一つ上の手があつたと見えます。

艾子と云つて相當學識のある男。常に酒を深く嗜んで、門人の諫言も容易に用ひない。如何にもしてと門人等、種々方計を巡らして居る處へ、艾子先生大酩酊して、例の小間物店を擴げた。時こそ來れと、豚の肉を一片その中

に置いて、「先生、先生には大變な事を遊ばしました、御覽あそばせ、只今小間物店と共に、臟腑をお吐きになりました、人には五臟より御座りませぬに、一臟吐き出しては最早四臟となりました、大抵に御禁酒なさらぬと、命が危うございます」と弟子が申せば。艾子先生、酔眼朦朧として豚の肉を眺め「成程、予は四臟になつたか、併し唐朝には三藏法師さへ活きて居た、四臟なら一臟多いから差支なからう」とて、またも酒を飲んだとの話です。斯う云ふ先生には一向困ります。

高雄の文覺上人は、仲々の荒法師であつて、豪邁跌宕到底繩墨に制せられないのは、普く人の知る所。西行法師を惡むこと甚だしく、「若し西行を見たらば、頭を打ち割らねば措くまい」と口癖のやうに云つて居られた。其癖まだ出會つたことはないのです。すると或年の事、高雄の法華會に、偶西行が來り會し、而も文覺の坊に就て一宿したいと乞ふた。いざござんなれ、天の與へかと、文覺、松の太木のやうな腕を鳴らしつ待つて居る處へ、西行が遣つて來た。何氣なき西行の姿を見るなり、筋張つた腕は輒らいで、慇懃に案内し、一室に懇談して深更に及び、恰も百年の舊知己の如くである。翌朝に至つて、西行が辭し歸るのを、文覺は親しく玄關に送つて、名殘惜氣に後姿を眺めてゐる。弟子共不審で堪らない。待ち兼た有様に、「御師匠、御師匠は何故、平生の御言葉の如く、西行の頭を打割られませなんだのございます」と申せば「さればこそ、彼法師は文覺に打たるべき顔つきでない、文覺こそ却て打碎かれる筈であつた」と、流石は英傑である。一旦擔いで居た我慢妄見の板をも、會見して真相が知れると同時に打捨て、更に新たに畏敬の板を擔いで追慕するところ、得て常人凡俗の企て及ばぬ邊であるまいか。親鸞聖人と辨圓の故事も思合されて尊いではありませんか。